The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アルツハイマー型痴呆患者と介護家族のQOLに関する心理学的研究
Author(s)	森本, 美奈子
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/750
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　名　森（もり）　本（もと）　美奈子（みなこ）

博士の専攻分野の名称　博　士（人間科学）

学位記番号　第　17481　号

学位授与年月日　平成15年3月25日

学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当

人間科学研究科行動学専攻

学位論文名　**アルツハイマー型痴呆患者と介護家族のQOLに関する心理学的研究**

論文審査委員　（主査）
教　授　柏木　哲夫

（副査）
教　授　南　　徹弘　　助教授　恒藤　　暁

論文内容の要旨

現在、痴呆患者とその介護家族については社会的にさまざまな場面で議論されている。特に介護保険導入や医療保険の改革によって、患者とその家族のQulaity of Lifeを真剣に議論すべき時期に来ていると思われる。そこで本論文では、痴呆患者とその介護家族のQOLに関する一連の調査研究の結果を報告し、今後の展望を述べた。

本研究は、アルツハイマー型痴呆患者と介護家族のQOLを明らかにし、その心理社会的要因について検討することを目的として行われた。

第1章では、高齢化社会に伴う痴呆患者の増加の現状と、ケアのあり方や、痴呆介護における心理学的研究の動向を概観した上で、心理社会的モデルを提示した。

その上で第2章では、まず患者の心理的適応状況を探索するため、その心理指標として、従来から言われているBPSDと性格変化の二点から検討することとした。第1節では、BPSDの指標として、医学的研究において汎用されているBEHAVE-AD尺度を用いてBPSDの発現状況を検討した。BPSDの下位因子ごとの構造を検討し、痴呆進行との関連を検討した結果、患者は痴呆の重症度にかかわらず感情障害や不安および恐怖などの心理的不安定さを呈し、それらに加え重症度の高い患者では精神症状や行動障害といった精神医学的症状が増加する傾向が明らかにされた。また患者の心理的不安定さを軽減することにより、従来いわゆる問題行動とされてきた精神症状や行動障害を軽減できる可能性があることが示唆された。

この心理的不安定さに関して、より詳細に検討を行うため、第2節と第3節では患者の性格変化に着目した。この指標について、患者の性格評価を客観的に行うため、本研究では類型論的立場ではなく、特性論的立場に基づく性格理論を用い、かつ方法論上の問題を考慮した。その上で、第2節では患者の病前性格特性に偏りがみられるか確認した。その結果、開放性の低さ、つまり保守的な傾向はあるものの他の特性に関してはほぼ平均的な性格特性であったことが明らかにされ、患者の性格変化は、痴呆疾患による影響が大きいと結論づけられた。さらに第3節で、性格特性の病前から調査時点までの変化を検討したところ、病前に比べて神経症傾向の増加と他の性格特性の低下が明らかにされた。また現在の性格特性とBPSDの関連を調べた結果、開放性次元の低さが精神症状と、神経症傾向が感情障害と関連のあることが明らかにされた。これらの結果から、痴呆進行との関連では、神経症傾向、外向性、開放性の変化に着目することが、痴呆早期発見につながる可能性が示唆された。また患者の心理的適応状況は、適応能力が低下し抑うつ的状況にあることが示唆された。以上の研究結果より、抑うつ的な心理的well-beingを反映するような簡

便な痴呆 QOL 評価尺度の開発を行う必要性が示唆された。

そこで第３章では、まず第１節で、先行研究における痴呆患者の QOL に関する定義と指標を概観した。その結果本節では、研究者によって定義は様々であり、大別すれば３種類の立場があることが示された。第一に、健康関連 QOL として、従来の一般高齢者の QOL 概念と同様に、認知機能や ADL を含むとするものがあった。第二に、患者の行動や社会的活動など、痴呆 QOL を活動能力に限定したものが挙げられた。そして第三に、気分や感情状態など、患者の心理的 well-being として扱われているものがあった。後者２つの概念については、研究によっては混在しているものもあり、一概にその分類は明確でなかった。これらの文献検討の結果と痴呆患者の疾病特性、さらに第２章における患者の心理的適応状況を考慮すれば、痴呆患者の QOL に対しては、第三の心理的 well-being と定義するのが適切であると考えられた。そこで第２節では、この定義に基づき、さらに方法論的問題を考慮した上で、新たに痴呆 QOL 評価尺度を開発することにした。その結果、患者の主観的 well-being を反映する、また信頼性および妥当性を伴った痴呆 QOL 評価尺度が開発された。本尺度は、表情の変化・会話の量・身だしなみへの関心・立ち居振る舞い・活動参加態度の５つの側面から患者の QOL を測定することができ、今後の心理社会的介入における効果指標として有用であると判断された。

第４章では、このような患者の QOL に対して影響を与えるとされる家族環境について検討するため、介護家族の態度要因に着目することとした。まず第１節では質的検討の結果、「行動的態度」「情動的態度」「思考的態度」の３要因が見出され、介護者の態度構造の根底に、情動的態度があると考えられた。しかし患者のケア環境の一つとして、介護者の態度を測定できるような尺度開発および態度構造の検討が必要であると考えられた。そこで第２節では情動的態度要因に対して、分裂病患者でその臨床使用が定着している EE の概念を導入した。そして EE における３つのカテゴリー（情緒的巻き込まれ（EOI）・批判（CC）・暖かみ（Warmth））に関する尺度を作成し、その態度構造を検討した。その結果、愛情や共感といった暖かみの感情は批判的感情を直接的には緩和させるものの、その一方で情緒的巻き込まれを媒介すると、批判的感情を相乗させてしまうことが示された。よって患者の QOL に影響を与えるとされる高 EE の状況に結びつかせないためには、家族介護者を情緒的巻き込まれすぎの状況に追い込まないことが必要であるとの示唆が得られた。このような態度構造に関する考察をもとに、第３節では、痴呆患者の介護家族における EE 判定基準を検討した上で、EE 判定に有効な分類基準を提示し、さらに EE を通して患者の QOL および介護家族の QOL を検討した。その結果、EOI におけるカットオフポイントを用いて高 EE 群の抽出を行うのが妥当であるとの結果が見出され、それによって患者と家族の QOL の低さを検出することができた。さらに EOI への影響要因として、主に介護者の介護時間の長さが高 EE を増大させ、いくつかの社会的支援の必要性が示された。

最後に第５章では、以上の研究をとおして得られた示唆に基づき、痴呆患者とその介護家族を対象とした心理教育的介入へ向けた提言を行った。そして痴呆研究における今後の課題および展望について述べた。

論文審査の結果の要旨

本研究は、アルツハイマー型痴呆患者と介護家族の QOL を明らかにし、その心理社会的要因について検討することを目的として行われた。

これまでのアルツハイマー型痴呆患者の QOL 研究は認知機能、日常生活動作、行動や社会活動などに限られたものが多かったが、本論文の卓越性は患者の主観的 well-being を反映する、また信頼性および妥当性を伴った痴呆 QOL 評価尺度を開発したことである。本尺度は、表情の変化・会話の量・身だしなみへの関心・立ち居振る舞い・活動参加態度の５つの側面から患者の QOL を測定することができ、今後の心理社会的介入における効果指標として有用であると判断された。

また、家族介護者の研究においては、介護者を「情緒的巻き込まれすぎ」の状況に追い込まないことが重要であるとの提言をしている。

以上の研究成果より、本論文は博士（人間科学）の学位に充分値すると判定された。